

菊池誠一著

『ベトナム考古学を学んで  
—フィールド調査28年—』

時 枝 務

本書は、日本におけるベトナム考古学の草分け的存在である著者が、昭和女子大学を退職するにあたって編んだ論集である。著者の個人的な学問の歩みをまとめたものであるが、それは日本におけるベトナム考古学の足跡を示すものであり、ベトナム考古学、あるいは東南アジア考古学にとっては貴重な一冊であるといえる。

本書は、「はじめに」「一部 ベトナム研究」「二部 史跡の保存と活用（ベトナム語翻訳）」「三部 治安維持法と戦争」「四部 その他」「おわりに」から構成される。また、別冊として『菊池誠一著作目録（稿）（一九八〇～二〇一九）』が付されていることも、後学には便利なものとなっている。

本書は、基本的に四部構成であるが、「四部 その他」もおもにベトナム考古学について記した文章で構成されているので、「三部 治安維持法と戦争」以外はベトナム考古学について論じられているとみてよい。

それでは、本書の内容を紹介し、評者なりのコメントを付すことにしよう。



2020年3月20日発行  
スマッシュ  
A5判 316頁  
定価 本体1,500円+税

「はじめに」では、本書が、昭和女子大学を定年退職するに際して、長年書き溜めた短文を集めたものであることが述べられている。

一部では、冒頭に置かれた「ベトナム考古学と私」が、総論としての位置を占めている。

著者二四歳のときの初めての海外旅行先がベトナムで、ホーチミンの本屋でたまたま入手したベトナム語の考古学教科書である『ベトナム考古学の基礎』と帰国後取り組み、やがてその翻訳書『ベトナムの考古文化』を出版する。そして、ベトナム留学を果たし、これまた偶然にもホイアンの発掘調査に従事する幸運に恵まれる。

その経験談には、先駆者だけが経験できる濃厚な時間が籠められており、読者は圧倒される。一瞬、サクセスストーリーを地で行った、なんと運のいい奴だという思いがよぎるが、本人の努力と苦労の経験談はそんな思いを吹き飛ばす。

一部では、胡城などの発掘調査成果が示されるが、海外調査の問題点についても著者の経験にもとづいて具体的な指摘がなされている。そのなか

で、ホイアン事件に触れた一文が挿入されているところに、後述する三部との関連が見出せよう。

二部は翻訳であるが、ベトナムにおける史跡の保存と活用についての現状と課題が述べられ、日本の史跡のあり方について考える参考例が示されている。事例は、北部から南部へと順に配列され、ベトナム全土の状況が見渡せるように工夫されている。なかでも、ホイアンの町並み保存に関する翻訳が多いのは、ある意味当然のことではあるが、町並み保存に留まらず、埋蔵文化財の保護と活用の課題にまで著者の視点が及んでいる点に注意して欲しい。また、文化財は、一国的な視座からの保存・活用が連想され勝ちであるが、著者が、国際的な視座を獲得することによって、ほんとうの意味での保存・活用が可能になると説いている点は傾聴に値しよう。

三部は、他の部とは大きく異なり、日本の近代史を問う内容である。著者の生れ故郷である群馬県群馬郡滝川村（現、高崎市）における治安維持法犠牲者である菊池岩雄や田口ツギにスポットライトをあてるところから始まり、治安維持法下での考古学のあり方を問題とし、学問の自由を奪った悪法下での先人たちの苦労を振り返る。さらに、治安維持法犠牲者の遺族の声に耳を傾け、果ては考古学の立場から戦争とはなにかを問いかける。三部は、考古学者がみた近代史であるとともに、

現代社会にコミットメントしようと努力しているところに特色を見出すことができる。

四部は、ベトナム考古学界の動向、ベトナムの博物館と史跡、追悼文から構成されている。

まず、ベトナム考古学界の動向では、最新の成果を紹介するだけではなく、ベトナムでの学会発表の経験談や日越シンポジウムの開催経験、ハノイ国家大学の考古学実習参加記など、実際の体験を踏まえたものが多く収められており、考古学を介した日越交流の実態を知ることができる。

ついで、ベトナムの博物館と史跡では、博物館としては女性博物館とソンミ村虐殺証跡博物館という人権をめぐる展示に焦点をあてる。史跡としては北部から南部までの著名な考古学的遺跡を取り上げ、その現状をつぶさに報告するとともに、盗掘品の売買に日本人が絡む厄介な問題に触れている。史跡踏査報告の「オクエオ（オケオ）遺跡踏査記」は、臨場感溢れる旅日記風な叙述が、文学的な香りが漂い、考古学者藤森栄一の著名な作品「遠賀川日記」を連想させる。

最後の追悼文は、松本清張・大野晋・原田大六の三人を悼んだもので、松本・大野についてはベトナムとの関係が主要な話題であるのに対し、原田については個人的なエピソードが披露されており、ニュアンスが違う。いずれも、著者が若い頃の著作で、ベトナム考古学に本格的に取り組む以

前の古代史や考古学に憧れる青年の姿が髣髴と浮かぶ。

「おわりに」では、国文学専攻であった著者が、仲間と学習院大学考古学研究会を立ち上げたのを皮切りに、やがて考古学を教える立場になるまでの経緯が説明される。

本書の第一の特色は、副題にある通りフィールドワークを主軸に、話題が展開していることであろう。いうまでもなく、フィールドワークのなかでも、発掘調査が重きをなしている。海老名本郷遺跡に始まりホイアンまで、多くの遺跡の発掘に携わるなかで考古学や歴史学について思考してきた足跡が、豊富なエピソードに彩られながら叙述されている。実地に臨んで、汗水流しながら、そこに展開した歴史や人生に思いを馳せるのが、著者の学問の流儀である。その点、著者は、フィールドの人であり、書斎の人ではなさそうである。

ベトナムでの発掘調査は、初期鉄器時代のランヴァック遺跡に始まり、ホイアンや胡城など多くの遺跡に及んだが、一九九〇年代に日本人がベトナムで発掘をおこなうこと自体が、最先端のことであった。著者の仕事は、ホイアンを中心とした近世日本町をめぐる諸問題に収斂していったが、著者の関心は幅広く、旧石器時代から近現代の戦争遺跡にまで及んでいる。それにしても、現地に行き、発掘し、考えることは、書斎で考えるほど

容易なことではない。

第二の特色は、著者の学問が人への関心であり、考古学者にありがちなモノに終始する個別実証主義的な姿勢とは無縁なことである。四部に収められた「一九七九年五月二八日の原田大六先生」を読むと、著者が原田大六という個性溢れる人物に心酔していたことが、痛いほどよくわかる。また、近世のホイアンの研究でも、陶磁器をはじめとする遺物に没入することなく、それを使った人々に目配りしているところに著者の真骨頂がある。さらに、三部の研究でも、事件被害者に対する優しいまなざしを感じるのは、評者だけではあるまい。著者の学問には、人への共感に支えられた、人への強い関心がある。

第三の特色は、冒頭で言及したことではあるが、本書に収められた大部分の著作が基本的に日本におけるベトナム考古学の学史として位置づけられるということである。そのことは、日本におけるベトナム考古学の草分け的存在としての著者の立場そのものであり、しごく当然な評価である。ただ、成果という点に絞れば、今までばらばらだった著作が、一冊にまとまったことの意義は大きい。本書をひもとけば、ありし日のベトナム考古学と、それを担った著者の姿が垣間見えてくる。

（ときえだ つとむ 立正大学文学部教授）